

「日本語は非論理的だ」と、よく言われる。しかし、どういう意味なのだろう。日本語のどういうところが非論理的なのか。いや、そもそも「非論理的だ」で何を意味しているのだろうか。それはつまり、「」ということは何を意味するのか、ということでもある。

3 日本人は非論理的か

(・・・) 「日本語を非論理的に使う」とは、どういうことだろう。

ひとつには、推論に関して言葉を正しく用いない、ということがあるだろう。「したがって」と書かれてあるのに、どうにも根拠と結論の関係がつかないような事例には、たしかにちよくちよくお目にかかる。あるいは、いわゆる誤認推論というものも、けっきょくは先に述べた論理語の不正使用にほかならない。

だが、私の感じでは、日本人が非論理的だと言われるのはこの意味においてではない。誤推論を犯してしまうのは、とくに日本人に特有のことではないだろう。むしろ、言葉の使い方があいまいであるとか、断片的であるとか、一貫しないといった意味で、日本人は非論理的だと言われるのではないだろうか。

このような意味で「非論理的」と言われるときの「論理」の意味は、「言葉の意味の連関性」であると考えられる。たとえば、「姉の息子」という言葉と「甥」という言葉の連関性である。推論というのは、そうした連関性を利用して、ある根拠からある結論を導き出すことにほかならない。そのとき、とくに論理に違反しているわけではなくとも、そうした言葉の意味の連関性を強く意識したものから、ほとんど無視したものまで、程度の差が生じてくることになる。日本人が非論理的と言われるのは、まさに、その言語使用に連関性が乏しいということであると思われる。いわば、つながりがゆるく、コマ切れなのである。

ここには、日本人が他人に対してどういう関係のとり方をするかが、かなりダイレクトに反映されていると、私には思われる。私が見るところでは、「日本的」と形容したくなる言語使用の特徴は、相手の文脈をとことん読みとろうとするところにある。いま話しかけている相手がどういう考えや知識をもっているのか。どういう文化的背景に立っているのか。そしていま現在、自分と相手が立つこの状況はどういう「場」を形成しているのか。そうしたことを読み、その上に立って、発話を行うのである。これは非常に重要な言語的技術であるが、日本人は他の外国人たちよりもその技術に長けているのではないだろうか。だが、私の考えでは、実は、日本人が研ぎ澄ませてきたこの技術こそが、日本人の「非論理性」と呼ばれてしまう特質を生み出しもしているのである。

すでに述べたように、「論理」とは言葉の意味の連関性において成立するものにほかならない。それゆえ、自分が発話したある言葉と他の言葉との連関性を明確に提示しないような発話は、非論理的と言われることになる。話題が脈絡なくコロコロ変わるとか、ある話から次の話への飛躍が大きい、等々。あるいはまたひとつの文の中でもその連関性が明

確でない場合には非論理的と言われる。さて、なぜ日本人はそのような意味において「非論理的だ」と言われてしまうのだろうか。それは、コミュニケーションにおいて、連関性を相手にゆだねるからだと思われる。発信する側がつなげるべきところをすべてきちんとつなげて手渡すのではなく、つながずに渡して、相手につながせるのである。

たとえば、「春はあけぼの」と言われる。ここで、「あけぼのがどうかしたのか」などと応じてはいけない。発話者はこれで相手は「春」と「あけぼの」の関係をつなげられると踏んでいるのである。聞き手もその期待に応えねばならない。あるいは、接続詞を明示することを嫌がるなどという傾向も、同様のものと考えられる。たとえば谷崎潤一郎の『文章読本』には接続詞をめったに使うなと書いてあるが、これもつまり、自分ではつながずに、相手につながせようというのである。

こうして相手につながせようとするためには、それだけ相手の文脈をきちんと読み取っていないといけない。相手の知識はどうであり、相手はどういう人かということ把握し、さらに「場」を読んで、その上で、この場面でこの相手ならばこれでつなげられると判断して、あえて断片を送るのである。かなり高級な技術であるが、実のところ、ふつうの日本人の場合、日常のかなり低級な会話においても、それとなく発揮されている技ではある。

このようなやりとりは、なるほどいちいちこちら側がきちんとつないで表現しなければ気がすまない流儀から見れば、あいまいで、飛躍が多く、非論理的にも見えるだろう。しかし、うまく機能しているかぎりでは、別に非論理的と謗（そし）られるいわれはない。つまり、ちゃんと相手はそれをつないで了解できているわけなのだから。だが、じゃあそれで万事オーケーかと言えば、そうもいなくなってきたのが、昨今のご時世というものである。

相手の文脈を読んで発話するという高級な技術は、その反面脆さをかかえている。「読めない相手」にはどう言えばよいのか分からなくなるのである。外国人相手にうまくしゃべれないのは、実は外国語がへたなせいばかりではない（と思う）。日本語で鍛え上げたこの高級な技術を捨てることができないからにほかならない。おそらく、自分がふだんそういう高度な技を駆使していることにも気がついていないに違いない。使っている自覚がないから、使わないでいることもきない。そしてさらに悪いことに、代わりとなる技術がない。文脈や背景が読めない相手に対しては、きっちりこちら側から言葉をつなぎ、接続詞もちゃんと使って、その連関性を明示し、暗黙の前提を可能なかぎり少なくして、そうして表現しなければいけないのだが、それがなかなかできない。つまり、論理力が身につけていないのである。

事情はいまやけっして外国人相手だけの話ではない。日本人同士であっても、その文脈や背景が読めない相手が増えてきた。この異質さに取り囲まれて、なおもこれまでのような「相手の文脈にのせて発話する」という技術で押し通そうとすると、これら異質な「読めない相手」は「話にならない相手」となり、単純に無視するということにもなる。この閉塞を破るのは、相手につなげてもらおうとするのではなく、発者の側が自分の言いたいことをきちんとつなげて相手にとどけること、つまりは、論理的に話すことだろう。

そのように論理的に話すための道具立てを、日本語はすべて十分に備えているのだから、さあ、あとはそれを使う側の問題である。……と、言いたいのだが、最後に

もうひとつ、述べておきたい。相手につなげさせるという技術で伝統的に運用されてきた日本語は、やはり、それにふさわしいものになっていると言わねばならないだろう。言葉というものは、長年特定の使われ方をしていて、言葉の構造それ自身の内にその使われ方が反映してくるものである。日本語の場合には、たとえば「ぼくはうなぎだ」のような文に見られるように、文脈でその連関性を固定しつつ、「ぼく」と「うなぎ」を相手につなげさせる文が、きわめて自然で適格な日本語の文として通用する。つまり、「こちらがきちんとつないでやる」という発想のもとでは、省略が多く、あいまいで、飛躍しているようにしか見えない表現が、日本語の場合にはそのまま正当で自然な表現とされるのである。これは、日本人のコミュニケーションの技術が日本語という言語の構造に織り込まれ、反映されてきた結果であるだろう。

このような意味でならば、なるほど、日本語というものは非論理的でもある、と認めねばならないのかもしれない。